

# 教育課程部会

## I. 研究の概要

### 1. 研究課題

新しい時代に必要となる資質・能力を育成する  
「社会に開かれた教育課程」はどうあるべきか

## 2. 研究内容

### 【研究内容 1】

学校教育の好循環を生み出す  
「カリキュラム・マネジメント」の実現

- ア. 構造的・弾力的な教育課程の編成
- イ. 調査・データに基づいた  
P D C Aサイクルによる改善
- ウ. 外部資源の活用、外部機関との連携

### 【研究内容 2】

自ら課題を発見し解決する資質や能力を育成する  
「総合的な学習の時間」のあり方

- ア. 探究的な見方・考え方、主体的・対話的な学び
- イ. 発達段階に応じた縦のつながりと各教科等との横のつながり（特色ある教育の推進）

## 3. 研究方法

### (1) 交流計画

前半、新学習指導要領実施に向けての理論研修会を全体で行う。後半、グループごとに各自持ち寄った実践レポートの交流を行い、研究課題に対する協議・意見交流を行う。

### (2) 分科会構成

小学校の部会員で7グループ、中学校のグループで5グループを編成し、レポート交流を行う。グループ編成は、登録している研究内容に限らず、多くの実践を交流し、見識を広げていく。

## Ⅱ. 実践研究の経過と成果

### 1. 実践研究の経過

#### (1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 7日 第1回部会役員研修会  
研究課題・内容・方法の確認、部会当日について、日程確認
- 5月24日 第2回部会役員研修会  
研究協議会の協議方法（分科会構成・役割分担）の検討、当日までの仕事内容の確認
- 7月 1日 部会だより第1号発行
- 7月31日 第3回部会役員研修会  
研究協議会当日の協議内容・方法の確認
- 8月17日 部会だより第2号発行
- 9月 4日 石教研課題部会研究協議会  
第4回部会役員研修会  
部会だより第3号発行
- 10月16日 第5回部会役員研修会  
研究の成果と課題の洗い出し、「石狩の教育」原稿読み合わせ
- 1月31日 第6回部会役員研修会  
今年度の研究のまとめ、次年度の研究について

#### (2) 部会役員研修会での研究成果

- ① 今年度も部会員の関心が高い、新学習指導要領に関する理論研修会を行うこととした。
- ② 理論研修会を行うため、今年度も南北2ヶ所ではなく、1ヶ所開催とした。
- ③ 3回の部会報とHPで、部会員への研究内容や日程などの周知を行うことができた。
- ④ 講演会と分科会の両方を実施する形を継続していくこととした。分科会をより有意義なものにするために、運営方法などを見直し、予定の50分間を確実に保障することを確認した。

### 2. 課題部会研究協議会での交流

#### (1) 課題部会研究協議会での交流内容

##### ① 実践・レポート交流の様子

各学校が研究内容に沿ったレポートを持ち寄り、交流を行った。その後、討議の柱を軸に研究協議を行った。各グループのレポートで取り上げられた項目の一部を紹介する。

Aグループ（小） 司会：横山 隆也（石狩双葉小） 記録：新保 なおみ（江別大麻小）  
・外部資源の活用、外部機関との連携 ・土曜授業 ・プログラミング教育  
・学校改善の取り組み ・学力向上 ・R- PDCA サイクルによる改善 ・道徳に関して

Bグループ（小） 司会：砂原 史朗（江別大麻泉小） 記録：相原恒一朗（石狩南線小）  
・道徳に関して ・60分授業のもち方 ・小中一貫 ・学校改善の取り組み  
・外部資源の活用、外部機関との連携 ・モジュールタイムの運用

Cグループ（小） 司会：徳中 和将（千歳緑小） 記録：内藤 裕一（江別第二小）  
・保護者、地域の理解に支えられた教育課程の見直し ・中間評価について ・小中一貫  
・小中連携 ・学校力向上 ・学力向上 ・HPの更新 ・モジュールタイムの運用

Dグループ（小） 司会・記録：山本 武（石狩双葉小）  
・学校改善プラン ・「カリキュラム・マネジメント」 ・行事の精選 ・地域連携  
・学力向上 ・モジュールでの取り組み ・「主体的・対話的で深い学び」 ・学校力向上

Eグループ（小） 司会：林 克哉（千歳信濃小） 記録：谷藤 健（石狩南線小）  
・学習プリントの取り組み ・C4thの活用 ・到達度チェックの取り組み ・家庭学習  
・習熟度別、TT指導 ・外国語に対する対応 ・放課後学習、朝学習での学習支援  
・小中一貫 ・小中連携 ・コミュニティスクールが抱える課題 ・地域連携

Fグループ（中） 司会：永間 尊史（恵庭中） 記録：鬼頭 孝史（江別第一中）  
・小中一貫 ・土曜授業 ・外部との連携 ・3学期制と2学期制のギャップ  
・英検 I B Aの活用 ・特徴的な取り組みについて

Gグループ（中） 司会：小森 亨（当別中） 記録：吉村 やよい（北広島西の里中）  
・コミュニティスクール ・外部人材、外部資源の活用 ・外部機関との連携  
・キャリア教育の実践 ・小中一貫

Hグループ（中） 司会：吉田 純永（江別大麻中） 記録：兵藤 貴信（恵庭中）  
・コミュニティスクール ・小中連携 ・進路学習 ・学校支援地域本部事業について  
・外部資源の活用、外部機関との連携

Iグループ（中） 司会：中出 真勇（恵庭中） 記録：堀部 秀成（北広島広葉中）  
・小中連携 ・外部資源の活用 ・コミュニティスクール ・英検 I B Aの活用  
・地域支援の取り組み ・英語力向上について ・小中一貫

Jグループ（小） 司会：黒崎 寛人（当別小） 記録：佐伯 俊光（江別文京台小）  
・特徴的な取り組みについて ・アイヌ文化学習 ・家庭学習  
・新学習指導要領への対応について ・外部資源の活用 ・外部機関との連携

Kグループ（小） 司会：前田 和寛（石狩花川南小） 記録：鶴川 正規（石狩南線小）  
・特徴的な取り組みについて ・大規模校としての難しさ ・外部との連携  
・縦、横のつながりを意識した総合的な学習の時間 ・新学習指導要領への対応について

Lグループ（中） 司会：堀内 直樹（北広島西の里中） 記録：北條 裕（江別江陽中）  
・職場体験学習 ・中学校側から見る小中連携 ・外部資源の活用

## ② 成果と課題

○グループを小・中で分けたことにより、小中連携、道徳、外国語など校種ごとのタイムリーな話題について交流することができた。また、学力向上や新学習指導要領などの新たな課題に対する各校の工夫を凝らした取り組みについても交流することができた。新学習指導要領への移行期間に課せられたものの大きさを再確認する機会となった。

△レポートについて協議時間が十分に取れなかったこともあり、各校の状況報告にとどまり、協議までできなかつたり、グループ全員の発表が満足にできなかつたりしたグループもあった。理論研修の時間を短縮するなどの改善が必要である。

△前半の理論研修会、後半のレポート交流・協議ともに有意義な取り組みである。限られた時間の中で有効な交流・協議ができるように、さらなる運営上の工夫が必要である。



## (2) 課題部会研究協議会での協議内容

レポート発表内容（各学校の取り組み内容）やグループ協議で挙げた話題について一部を紹介する。

### 討議の柱 1

学校教育の好循環を生み出す  
「カリキュラム・マネジメント」の実現

### 【構造的・弾力的な教育課程の編成】

#### \*外国語活動・道徳を含む

- ・「カリキュラム・マネジメント」や時数の確保など、移行期間中に課せられたものの大きさを改めて痛感した。情報収集のアンテナを高くし、共有していくことによってこの改革期を乗り越えていくことが大切である。
- ・教育課程の大幅な見直しを図ったことにより、生徒指導案件が減少し、校内が落ち着いた。
- ・地域への説明を丁寧に行った上で、運動会の種目の見直しを行った。
- ・C4thの「いいところみつけ」への記録化を図り、道徳の授業の中で子どもたちの様子について記録をしている。
- ・外国語活動の時数増加に伴い、モジュールタイムやモジュール授業、60分授業を導入している。

### 【調査・データに基づいたPDCAサイクルによる改善】

#### \*学力向上策・指導方法の工夫改善を含む

- ・中間評価を生かして、自校の課題について話し合っている。全職員が同じ方向をむいて仕事ができるようにしている。
- ・行事などで、児童自身が主体的に考えていたか、主体的に行動できていたかを振り返らせる場面を設定している。また、毎時間の授業の最後に自己評価の時間を設定し、児童の意識高揚を図っている。
- ・学校の目標（目指すところ）が明確になっているところは、職員のベクトルが合ってくる。様々な取り組みが各校でなされているが、何事も持続可能なものにしていくためには、組織として動くということが大切である。
- ・職員数が多く、「分掌部会→運営委員会→職員会議」という組織的な流れを組んでも提案事項がまとまらないことがある。
- ・学力向上に向けて、放課後学習や朝学習などで担任外の教員が個に応じた指導を行っている。
- ・学力向上の取り組みとして、各校では様々な対策を講じている。

〈例〉

- 中・昼休みの短縮や掃除カットにより放課後に学習時間を確保
- 月曜日の5時間目終了後に15分間の学習時間を設定
- 四則計算が身に付いていない児童に対する朝学習の学習支援
- 毎週木曜日の朝学習を「算数の日」と設定し、苦手分野の問題に取り組ませる
- 学年ごとに最低限の到達目標を設定し、「評価テスト」を実施
- 児童がいつでも持って行って取り組める学習プリントを設置
- 階段に学習に関する掲示物を貼る



## 【外部資源の活用、外部機関との連携】

### \*地域連携・小中連携・コミュニティスクールほかを含む

- ・小中でスタンダード（学習規律）を揃えたり、生徒指導の交流を行ったりしている。
- ・中学校側から見ると、小学校の先生の理解を得られるようにするためにはどうしたらいいのかというのが課題。小学校へ出向くよりも小学校側から中学校へ来てもらう方が連携を取りやすいのではないか。
- ・小中連携は、揃えることばかりではなく、違いを含めて、お互いの学校を知ることでも大切なことである。
- ・小中一貫の取り組みとして、中学校英語教員の小学校への乗り入れ授業を行ったり、6年生の理科で中学校を意識して教科担任制を導入したり、ノートのまとめ方の統一を図ったりというようなことを行っている。
- ・コミュニティスクールに関わる人たちの質の向上も課題である。
- ・HPの更新をスピーディーに行うことで、保護者や地域の人たちが学校での取り組みに対して関心をもってもらえるきっかけとなる。
- ・地域と協力していくため、情報のきめ細やかな発信に心がけている。
- ・総合的な学習の時間は、外部と連携することのできる領域である。その中で、他者との関わりや、相手・目的意識を高める指導を行うことができる。

## 討議の柱2

自ら課題を発見し解決する資質や能力を育成する「総合的な学習の時間」のあり方

## 【探究的な見方・考え方、主体的・対話的な学び】

- ・大規模校になると、見学や体験の受け入れ先を検討することが困難になる。学年をいくつかのグループに分けて、時間や日にちをずらして受け入れていただくしかない。
- ・外部との関わりや地域性があり、体験が中心になってしまったり、どうしても取り組まなくてはいけない内容が出てきてしまったりする。そこに時間がかかってしまうため、個別に課題を立てて取り組む時間が確保しづらいことがある。
- ・総合的な学習の時間は、地域の人材や素材に頼る部分が多い。探究的な学習にしていくためには、いかにして対象と繰り返し関わっていくかがポイントとなり、大切にしなければならない部分である。

## 【発達に応じた縦のつながりと各教科等との横のつながり

### (特色ある教育の推進)】

- ・地域素材を活用した学習は、その旬の時期に取り組む必要がある。また、他教科との兼ね合いもあるために、さらに学習時期は限られる。1年間の総合的な学習の時間のビジョンをしっかりとをもって取り組む必要がある。
- ・今ある地域素材を活用することだけではなく、新たな素材を発掘することも大切にすることで、よりよい実践を目指していきたい。
- ・プログラミング教育に関しては、まだ各校ともあまり進んではない状況にある。総合的な学習の時間だけではなく、他教科でも取り組んでいかななくてはならないものなので、どのように取り入れていくべきかはできるだけ早急に対応していかななくてはならない。
- ・職場体験学習を中学3年生から2年生へ移行したことで、他の行事や時数への影響が出る。内容を変更することによる負担は大きい。

### Ⅲ. 理論研修会

#### 1. 理論研修会の内容

北海道立教育研究所企画・研修部主査 松尾 康氏をお招きし、「新しい時代に必要となる資質・能力を育成する『社会に開かれた教育課程』はどうあるべきか」と題して行った。

(1) 学校教育の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現

- 「カリキュラム・マネジメント」のおさえ
- 調査・データに基づいた PDCA サイクルによる改善
- 学校段階等間の接続、外部資源の活用
- 道徳教育及び外国語教育の改善・充実

(2) 自ら課題を発見し解決する資質や能力を育成する「総合的な学習の時間」のあり方

- 探究的な見方・考え方
- 発達段階に応じた縦のつながりと各教科等との横のつながり

について詳しい解説をいただいた。



#### 2. 理論研修会の成果

「各学校でこれからの時代に求められる資質や能力を育てていく」という意識を全職員がしっかりとつことが大事だと再認識する場となった。全国学力学習状況調査の結果から明らかになった諸課題に対して取り組むだけでなく、これからの時代に求められる資質・能力を育てていくにはどうしたらいいのかということも考える必要があることを理解することができた。学校段階等間の接続についても考える必要があり、幼稚園や保育園から小学校へと円滑に接続するためのスタートカリキュラムの必要性について知ることができた。また、道徳や外国語、総合的な学習の時間の改訂のポイントや今後のあり方等についてのお話もあり、新学習指導要領の本格実施に向け、学校全体でさらに考えていかななくてはならないということを確認することができた。

### Ⅳ. 部会研究の成果と課題

#### 1. 成果

「社会に開かれた教育課程」に迫るため、前半は理論研修会を通して、「カリキュラム・マネジメント」の実現についてや、総合的な学習の時間のあり方についての理解を深めることができた。また、後半のレポート交流・協議では、各校の特色ある取り組み、コミュニティスクール、小中連携など、各市町村や各校の実践を知ることができ、貴重な情報交換の場を提供することができたと考える。学校教育の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現や、自ら課題を発見し、解決する資質や能力を育成する総合的な学習の時間のあり方について、見聞を広げることができた。

#### 2. 課題

今年度も新学習指導要領・学力向上・小中一貫・道徳・外国語など、教育現場が大きな変化を目の当たりにしているため、「カリキュラム・マネジメント」に関する内容が多かった。「総合的な学習の時間」の話題は少なめではあったが、「総合的な学習の時間」について取り上げる貴重な場として、次年度以降も研究を継続し、より充実した学習のあり方を探る必要がある。

小学校では2020年度、中学校では2021年度の新学習指導要領全面実施に向けて、これまで以上に教育課程の果たす役割が重要だということを感じた。来年度以降も、新学習指導要領に対応した研究を推進していく必要があると考える。

(文責 鹿島 幸司)